

2022年5月22日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

イザヤ書 43 : 1～4

ルカによる福音書 22 : 54～62

「ペトロの否認」

<従えない者の代表>

イエスさまの一番弟子のペトロが、イエスさまとの関係を三回否定した場面です。

イエスさまは、ご自分がすべての人の罪を贖うために、死ななければならぬ、ということ。そして三日目に復活する、ということ、を、繰り返し弟子たちに教えて来られました。それが、神さまの御心であり、救いのご計画だからです。イエスさまは祈りをもって、この父なる神さまの御心に、従い抜こうとしておられます。

そして、イエスさまが十字架の苦しみを受ける時には、弟子たちもまた、サタンのふるいにかける、闇の力に覆われる、ということ、を予告されていました。サタンのふるいにかけることは、試練や誘惑などによって、その信仰が本物か偽物かが明らかにされる、ということ、です。

最後の晩餐の後、十字架の時がいよいよとなり、イエスさまは弟子たちに、目を覚まし、祈ることによって、信仰の戦いをするように。祈りによって、サタンの誘惑と戦うように、と教えてこられました。しかし、恐れの中で、不安の中で、弟子たちは信仰の歩みを、自分の力や自分の覚悟に依り頼もうとしていました。

ですから、祈るべき時に、弟子たちは眠り込んで、祈ることをやめてしまいました。ユダはサタンに負けて、神さまのご計画ではなく、人間の計画を実行し、イエスさまをユダヤ人の指導者たちに引き渡してしまいました。そして、一番弟子のペトロもまた、イエスさまとの関係を自ら否定して、絶ってしまうのです。

ルカによる福音書の著者は、このペトロの出来事を、恐れに捕らわれ、誘惑に負け、イエスさまに従うことが出来ない十二人の弟子たちの、最後の場面として描いています。

つまり、イエスさまを「知らない」と言ってしまったペトロの姿は、すべての弟子たちを代表する姿なのです。そしてまた、すべての罪人、つまり神さまの御心に従えないわたしたちを、代表する姿なのです。

<三回の否定>

さて、今日の聖書箇所を見てみましょう。54節にはこうあります。「人々はイエスを捕らえ、引いて行き、大祭司の家に連れて入った。ペトロは遠く離れて従った。」

イエスさまは真夜中にユダの裏切りによって捕らえられ、夜が明けるまでの間、大祭司の家に連れて行かれました。

その状況で、ペトロは弟子の中でただ一人、「遠く離れて従った」とあります。

ペトロはこの直前、イエスさまに「主よ、ご一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」と豪語していました。一人でも従っていったのは、自分はそのように出来るという自負と、覚悟があったからでしょう。

しかし、ここには「遠く離れて従った」と語られています。ここに、ペトロが人々の目を恐れていることが表れています。覚悟と恐れが交錯するペトロの心境が、「遠く離れて従った」との言葉に映し出されています。

それから、「人々が屋敷の中庭の中央に火をたいて、一緒に座っていたので、ペトロも中に混じって腰を下ろした。」とあります。ペトロは人々に紛れて、屋敷の中のイエスさまの様子が伺えるところに座り、成り行きを見守ろうと思ったのでしょう。しかしここで、たき火の光に照らされたペトロは、周りの人々に顔バレしてしまうのです。

3人の人物が、ペトロはイエスさまと一緒にいた、仲間だった、と指摘しました。

一番目は女中が「この人も一緒にいました」と言い、ペトロはそれを打ち消して「わたしはあの人を知らない」と言いました。

二番目は男の人が「お前もあの連中の仲間だ」と言い、ペトロは「いや、そうではない」と言いました。

三番目も男の人が、「確かにこの人も一緒だった。ガリラヤの者だから」と言いました。ペトロの返事の言葉に、ガリラヤ地方の田舎の訛りがあったのでしょう。イエスさまがガリラヤのナザレ出身ということは知られていましたので、これは決定的な証拠でした。しかしペトロは「あなたの言うことは分からない」と言ったのです。

ペトロは、ユダのようにお金をもらってイエスさまを引き渡す、というような、積極的な裏切りをした訳ではありません。ただ「知らない」と言うだけです。簡単な言葉です。

わたしたちも追い詰められたり、何かごまかしたり、責任逃れをしたい時に、「それは知らない」「そんなことは知らなかった」「わたしには関係ない」と、簡単に口にしてしまうことがあるのではないのでしょうか。

しかし、この実に簡単な言葉で、この消極的なひと言で、ペトロはイエスさまを裏切り、見捨てたのです。イエスさまとの関係を、自ら絶ったのです。神の御子イエスさまが、ペトロの名前を呼び、招き、共に歩いて下さった恵みの関係を、ペトロは一言で無かったことにし、自分から神さまの御手を振り払ったのです。

このペトロの出来事を、ルカによる福音書は、非常に重い罪として語っていると考えられます。実は、他の福音書のマタイやマルコでは、ペトロを問い詰めたのは、女性二人と、男性一人なのです。しかし、ルカは女性一人と男性二人としています。これが何を意味しているのか。

ある本では、男性二人がいることによって、裁判における証人の証言として成立する状況

である、ということを指摘しています。当時は、男性二人以上の証人が証言すれば、裁判において確かな証拠として成り立つのでした。

つまり、ここでは証人によって、ペトロが確かにイエスさまの弟子である、ということが証言されているのです。しかし、ペトロはこの証言を否定した。つまり、偽証の罪を犯したことになる、というのです。

「知らない」「そうじゃない」とペトロが発した言葉は、決して軽い言葉ではない。思わず言ってしまったで済む言葉ではない、ということです。その言葉でペトロは、イエスさまとの恵みの関係、神さまへの信頼、救いのご計画、復活の希望、そのすべてを否定する、重い罪を犯した、ということなのです。

<恐れ、恥>

しかしペトロは、どうして自分はイエスさまの弟子でない、と偽ったのでしょうか。どうしてイエスさまと自分は関係ない、あんな人は知らない、と言い張ったのでしょうか。

それは殆ど、衝動的に出てしまった言葉だったかも知れません。おそらくペトロには、ひたすら「恐れ」があったのです。

ユダヤ人の力ある指導者たちに捕らえられたイエスさまが、これからどうなっていくか、分からないはずはありません。イエスさまの仲間だと知られたら、自分もまた捕らえられ、イエスさまと同じ目に遭い、殺されるかも知れません。

その悪い予感の中で、ペトロは自分を自分で守ろうとして、偽ってイエスさまとの無関係を装った。イエスさまとの関係を否定したのです。

それに、ペトロはかつて、イエスさまを神の子であると、メシア、救い主であると信じ、告白をした者です。しかし、イエスさまがどのようなメシアであるかは、まだ理解していなかった。イエスさまが、苦難の僕として、十字架で苦しみを受け、死ぬことによってメシアとなられるということを、ペトロはよく分かっていませんでした。

ペトロはきっと、誰からも愛され、尊敬される、強くて勇敢な王様たるメシアを期待していたに違いありません。しかし今やそのメシアは、弟子の一人に裏切られ、人の手で捕らえられ、戦おうともせず、引き立てられていったのです。

そのような、弱々しい惨めな方の弟子であるということ。それを認めることを、ペトロは恥ずかしく思ったのかも知れません。

ルカによる福音書の 9:26 に、イエスさまがこう語られたところがありました。これは、ペトロがイエスさまのことを「神からのメシアです」と告白した後の場面です。

イエスさまは「わたしに従いなさい」という御言葉と共に、こう語られました。「わたしとわたしの言葉を恥じる者は、人の子も、自分と父と聖なる天使たちとの栄光に輝いて来るときに、その者を恥じる。」

しかしペトロは、イエスさまに従うことが出来ず、この場面で、イエスさまと、イエスさまの御言葉を恥じたのです。人々の前で、人々の目を気にして、人々を恐れて、ペトロはイ

エスさまを知らないと言い、すべてを否定してしまったのです。

このようにして、ペトロは罪を犯しました。ペトロは、自分の覚悟、自分の力によって、サタンに勝てる、イエスさまに従い抜ける、と信じていました。ペトロが信じて依り頼んでいたのは、神さまではなく、自分の覚悟や力だったのです。

また、人がまことに恐れるべきは、ただ神さまお一人であるのに、ペトロは人々を、人々の目を、恐れしました。

そして、イエスさまを恥じ、イエスさまを見捨て、その関係を自ら否定したのです。

こうしてペトロは、遠く離れたところに立って、最後には、従うことをやめたのです。

最初に申しあげましたように、このペトロの罪の姿は、わたしたちを代表する姿です。

わたしたちもまた、このようにして、自分の力で何とかしようとすることによって、周りの人々を恐れることによって、御言葉を恥じることによって、祈らないことによって、いとも簡単に、重大な罪を犯すのです。イエスさまとの関係を、恵みを、否定してしまうのです。

<予告のとおり>

ペトロは、このような弱さの中で、罪の中で、イエスさまを三度知らないと言いました。三度とは、徹底的に、ということです。イエスさまを徹底的に否定した。徹底的に神さまから離れてしまった。徹底的にサタンに負けてしまったのです。

その時、突然、鶏が鳴きました。そして、61節以下にはこうあります「主は振り向いてペトロを見つめられた。ペトロは、『今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう』と言われた主の言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた。」

ペトロは主の言葉を思い出した、とあります。時間で言えば、この場面のつい数時間前の、最後の晩餐の席で語られていたことです。その場面である、22章の31～34節をもう一度読んでみたいと思います。イエスさまとペトロの間で、このようなやり取りがありました。シモン、とはペトロのことです。「『シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。』するとシモンは、『主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております』と言った。イエスは言われた。『ペトロ、言うておくが、あなたは今日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう。』」

イエスさまは、弟子たちがサタンのふるいにかげられること、そして、シモン・ペトロが、そのサタンとの戦いに敗れ、信仰が偽物だと明らかにされ、信仰を無くしてしまうような状態に陥るだろう、とすでに語っておられました。

最初にもお伝えしたように、ペトロはこの時、これを必死に否定し、死んでもイエスさまに従っていくと、その覚悟を述べたのです。しかしイエスさまは、「今日、鶏が鳴く前に、

あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われた。そして今この時、まったく言われた通りになったのです。ペトロが三度イエスさまを知らないと言った時に、鶏が鳴いた。

そして、イエスさまは振り向いて、ペトロを見つめられました。

ペトロは、イエスさまのまなざしを受けて、言われた通りに、自分がサタンのおふりいにかげられたこと。そして、自分の信仰が偽物であることが明らかにされたと、はっきり知りました。死んでもよいとまで言ったあの覚悟も、あっけなく失われていた。イエスさまに従う覚悟を述べたその口で、たった数時間後に、イエスさまを否定していたのです。

ペトロは自分の言葉で、自分の決意も、覚悟も、信仰も、何も無い、ということを証明することになってしまったのです。それはもう、いたたまれない気持ちであったでしょう。もはやペトロは、イエスさまのまなざしに耐えられなかったのではないのでしょうか。

<イエスさまのまなざし>

ペトロを、見つめておられたイエスさま。しかし、このイエスさまのまなざしは、どのようなまなざしだったのでしょうか。「ほら見たことか」と、口先だけのペトロを責めるまなざしでしょうか。呆れ果てた、軽蔑のまなざしでしょうか。裏切ったことに対する、怒りのこもったまなざしでしょうか。

決してそうではありません。ペトロがサタンのおふりいにかげられることを予告なされた時、イエスさまはペトロのために、すでに祈っておられたのです。「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにおふりいにかげることをおに願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

イエスさまは、ペトロの弱さを、偽物の信仰を、抱いている恐れを、どうしようもない罪を、すべてご存じでした。そうして、ペトロがつかずき、倒れ、サタンに負けてしまうこともご存じの上で、ずっと祈って下さっていたのです。

「あなたの信仰が無くならないように。」

ペトロを見つめておられるイエスさまのまなざしは、この祈りのまなざしです。

自分の罪に気付いたペトロ。自分の力も、覚悟も、空しいものだと思い知らされ、打ち砕かれたペトロ。イエスさまとの関係を否定し、自分からイエスさまの弟子であることを辞めてしまったペトロです。

しかし、ペトロがそのように、イエスさまを恥としても、関係を否定しても、手を離しても。イエスさまは、このペトロを恥とされませんでした。関係を終わらせようとはなさいませんでした。決して手を、離そうとはなさいませんでした。愛することをおやめにはなりません。

ペトロの方から、まったく酷い仕方で、イエスさまの御手を振り払ったというのに。裏切ったというのに。離れて行ったというのに。

それでも、イエスさまが見つめて下さるまなざしは、始めから最後まで、決して変わらないのです。そのまなざしは、いつも愛と憐れみに満ちているのです。

そして、ペトロの方から一方的に破棄してしまったご自分との関係を、神さまとの関係を、イエスさまは御自分の命を与えることによって、その罪を贖い、関係を新しく回復させ、再びご自分と共に、神さまと共に、生きる者として下さるのです。

<神さまのまなざし>

今日の、旧約聖書のイザヤ書 43 章 1～4 節には、神さまがいつもわたしたちをどのように見つめて下さっているか。そのまなざしが語られています。

「ヤコブよ、あなたを創造された主は／イスラエルよ、あなたを造られた主は／今、こう言われる。恐れるな、わたしはあなたを贖う。あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名を呼ぶ。水の中を通るときも、わたしはあなたと共にいる。大河の中を通っても、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、焼かれず／炎はあなたに燃えつかない。わたしは主、あなたの神／イスラエルの聖なる神、あなたの救い主。わたしはエジプトをあなたの身代金とし／クシュとセバをあなたの代償とする。わたしの目にあなたは価高く、貴く／わたしはあなたを愛し／あなたの身代わりとして人を与え／国々をあなたの魂の代わりとする。」

わたしたちの造り主である父なる神さまは、わたしたちに、こう言われるのです。わたしの目にあなたは価高く、貴いと。あなたを愛しており、あなたのためになら、身代わりとして人を与え、国々をあなたの魂の代わりとすると。それらすべてを引き換えにしても、あなたが生き、あなたがわたしと共にあることを望んでいるのだと。

だから父なる神さまは、ご自分の愛する独り子イエスさまを、わたしたちの身代わりとして、わたしたちの罪をこの方に担わせるために、遣わして下さったのです。わたしたちの魂を救い出すために、神の御子イエスさまの命が代償として支払われるのです。あなたは、それほどまでに、価高く、尊い。この父なる神さまのまなざしです。

そして、このわたしたちに対する、父なる神さまの御心を知っておられるイエスさまは、この御心を実現するために十字架に向かわれるのです。イエスさまもまた、この愛のまなざしを持ってペトロを見つめ、わたしたちを見つめ、すべての罪人を救うために、十字架による御業を成し遂げて下さるのです。

<十字架と復活の御業によって>

…ペトロは、このまなざしを受けて、激しく泣いた、とありました。それは、自分の弱さを、どうしようもない罪を、徹底的に知らされ、打ちのめされた、絶望の涙だったに違いありません。

しかしこのペトロが、この場面で泣いて、悔い改めて、立ち直ったとは語られていません。

ペトロが本当に自分の罪が赦されたことを信じ、悔い改め、立ち直ったのは、イエスさまが十字架に架かって死なれ、そして復活なされた後のことなのです。

まずこれから、このペトロの罪を贖うためにも、イエスさまは十字架へと向かわなければなりません。ペトロが立ち上がるには、また同じように罪に捕らわれたわたしたちが、罪から解放されて、立ち上がるには。まずイエスさまが、父なる神さまの御心に従って、その救いの御業を成し遂げて下さらなければならないのです。

信仰が無くならないようにと、ペトロのために、わたしたちのために祈って下さったイエスさまは、その祈りを実現するために、十字架に向かわれたのです。すべての罪人が、その罪を赦され、神さまの御許に立ち帰り、新しく生きる者とされるために。イエスさまは、わたしたちすべての罪人の身代わりとなり、裁きを受け、有罪の判決を受け、十字架の死を、裁きの死を、受け入れて下さったのです。

そのようにして、わたしたちは罪の赦しを与えられました。破れた関係を取り戻されました。ですからわたしたちは、この方の十字架に、自分のどうしようもない弱さも、罪も、絶望も、すべてをお委ねして良いのです。お委ねするしか、ないのです。

そして、父なる神さまは、イエスさまを十字架の死から復活させられました。この復活によって、わたしたちは、イエスさまの十字架の死が、確かにわたしたちの罪の贖いとして成し遂げられたこと。そして、イエスさまを信じる者が、まことの新しい命と復活の約束が与えられるということ、確かなこととして、信じる事が出来るのです。

先程、ペトロがイエスさまを恥じた、というところで、ルカによる福音書の9章の御言葉を読みました。イエスさまが「わたしと、わたしの言葉を恥じる者は...人の子も（つまりイエスさまも）、その者を恥じる」と語られたところです。

ペトロは、確かにイエスさまを恥じて、その関係を否定してしまいました。しかし、イエスさまは、結局このペトロを恥じることはなさいませんでした。むしろイエスさまは、ご自分の十字架と復活の御業によって、イエスさまを恥じたペトロを、イエスさまを信じ、誇る者へと、新しく変えて下さったのです。

こうして、イエスさまの十字架と復活による罪の赦しによって、立ち上がらされ、新しくされ、御許に立ち帰るわたしたちを、神さまは愛と憐れみのまなざしをもって、喜んで受け入れて下さいます。

わたしの目に、あなたは価高く貴い、と言って下さる方が、わたしたちの神さまです。あなたのために信仰が無くならないように祈った、と言って下さる方が、わたしたちの救い主です。このまなざしによってこそ、わたしたちは信仰の道を歩んでいくことが出来るのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたの目に、わたしたちのことを価値高く、貴いと言って下さり、わたしたちを救うために、御子をわたしたちの身代わりとして下さったことを、驚きをもって覚え、心から感謝いたします。

わたしたちのどうしようもない弱さを、罪を、イエスさまの十字架と復活によって、お赦し下さい。ただ激しく泣くことしか出来ないわたしたちのために、イエスさまが祈って下さり、またすべての御業を成し遂げて下さったことを聞きました。

その祈りと、愛と、憐れみのまなざしの中に置かれていることを、心から信じ、すべてを御手に委ね、従う者とならせて下さい。

救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン